



①



③



②-1

②-2



④

## 地理の写真館

### ピナトゥボ火山の大噴火から16年

マニラ北西部約80kmにある海拔1740mのピナトゥボ山が大噴火したのが1991年6月15日、20世紀最大規模の火山爆発で山頂約400mが吹き飛ばされ、噴煙は高度40kmに達し、世界規模の大気汚染と異常気象をもたらした。半径40kmにわたって避難勧告が出され、25万人が避難したという。火砕流により300人が死亡、最終的には死者・行方不明者合わせて約900人が被害に遭った。

ピナトゥボ火山の東南16kmのクラークにあったアメリカ空軍基地は、火山灰の大量降下によって基地機能が壊滅的打撃を受けたので、91年11月にフィリピンに返還され米軍は撤退した。広大な基地跡は再開発されて国際空港・工業団地（日本企業も進出）・ゴルフ場などに活用されていた。

ピナトゥボ山麓に居住して被災したフィリピン最古の民族ネグリのアエタ族が住む避難集落を訪問した。300人程の集落で電気もないバラック家屋、劣悪な居住環境の中で生活していた（写真③）。住民の表情は

明るく、私たちが歓迎してくれた。火山碎石を収集し、韓国に園芸用軽石として輸出する計画をすすめていた（写真②-1、2）。

クラーク南方のバラックで火山灰泥流の大きな被害を受けた地域を訪れた。噴火時に10mにも堆積していた火山灰が、その後、毎年雨季になると土石流となって流出を繰り返して下流の農耕地や家屋を襲い、継続して大被害を及ぼしてきたという。川は防災のために堤防が築かれ天井川となり、ラハールと呼ばれる灰色の荒涼たる火山泥流地帯は草木が生えて緑の復活が見られた。

バコローの町は95年9月、火山泥流に呑みこまれて5万人の住民が避難したという。災害発生時には12mにも覆った堆積物は現在5mに沈下して固まり、その下に家屋や耕地が埋没していた（写真①）。サン・ギレルモ教会は床に堆積物が厚く溜まり、災害前の二階の窓を入り口として使用していた（写真④）。地域住民は避難地から戻ってきて住宅を再建し、一部は耕地を復活させて生活していた。

（盛岡女子高等学校 谷地研二）

#### 写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。海外巡検などで撮影された地理的写真を、資料編集部「地理・地図資料」係までお送りください。